WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

# 女學雜誌

明治二十年十月十五日刊行

附錄　ワシントン夫人肖像

Oct. 15
188-
no. 8

第八十號

毎土曜日發兌
一册正價五錢
府內無郵送稅

東京　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 80. OCTOBER 15TH, 1887.

第八十號

EDITORIAL:—Woman and Literary Work: No. I.

LEADING ARTICLES:—A Word Husband; History of the Woman's Right, bty Prof. N. Hozumi: No. IV.

MISCELLANIES:—Strange Apparitions in an Autum Night: No. III; My Tour during the Vacation, by H. Suzuki; Mother of Ikkiu; Education of Children.

CRITICAL NOTICES:—"Ukigumo," a New Novel, by J. Tsubouchi.

BIOGRAPHIES:—The Eminent Women: No. IV.

NOVEL:—"The Fragrant Rose": No. XIII.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISEMENTS.

●社說　女子と文筆の業第二（新聞雜誌の女記者）

●論說　良人に告ぐ（編者）○婦女權利の沿革第四（穗積陳重）

●雜話　秋夜の怪談第三（櫻田ゆかり）○鹽原入浴の記（鈴木弘恭）○一休和尙の母の教○子供を育つるの心得

●批評　浮雲の褒貶第四（石橋忍月）

●佳傳　女丈夫の傳第四

●小說　薔薇の香第十三回（月の舍しのぶ）

●新報　十二件

●廣告

●珊瑚の珠（第三十九回）

○詩伯バイロン曰く全世界の人々が擧つて吾を非難するよりも汝ち婦人が軟らかなる辭を以て一言するを更らに勢力ありと思へり

○作者シェークスピア曰く全世界に何如ほどの名筆の人ありとも女子の眼に現れたる程の美くしさを書き盡すものはあらじ

○十五ケ國にて

Em and Am in Hebrew and Arabic.
Madr in Persian.
Moder in Anglo-Saxon.
Matr in Sanscrit.
Moder in Sweedish.
Meter in Greek.
Moder in Danish.
Mater in Latin.
Moeder in Dutch.
Madre in Italian.
Mutter in German.
Mère in French.
Mater in Russian.
Mother in English.
Mathair in Ellic.

と云へるとを申す言葉の相違

○ナポレチンボナパートはセントヘレナの孤島に於て慷慨しスタル夫人を評して云く夫人にして若し余に敵せず寧ろ余を助けて其の健筆を揮るわれたらんには余が事業の成功せしと更に容易なりしならんと

○隱居の上人に檜垣の女の圖見せたりしに今より千餘年前つかた衣紋とやうにてエリと云ふものなく袖長くて後の方へかへれりと物知れる人に聞しが此圖には其の詞の如くなりしと語られたり（北窓瑣談）

女學雜誌第八十號

明治廿年十月十五日

## ●社說

### ○女子と文筆の業

#### （第二）新聞雜誌女記者の事

女流が文筆の業を執らるゝの日に當りて先づ第一に吾人が希望する所の者は則ちその新聞雜誌の記者と相成られたきことなり蓋し傳記歷史の書籍を著作する事及び小說物語の類を趣向する事なんどは何れも特に女流に適して尙ほ甚だ面白かるべき文筆の業たらんこと勿論なれども此等の二つにも超へて尙ほ能くこれに適當するのみか而かも當今の時勢に於て其の尤も必要を感ずる所のもの則ち女流が奮發して其身を新聞雜誌の記者となされたきことにある也。

そも〳〵文筆の業を執るものゝ中に就て凡そ新聞雜誌の記者ほど多忙なるは有るべからず亦たこれほど頓智、判斷、勉强、忍耐等の諸德を要するものはあらじ然れども其代はりとしては彼の一部一卷の書を著はすものに比らべ見るも尙ほその人に大切なるほどの沈思熟考をば之れに入用すべしとも思はれず決極其の餘暇の甚だ少きが故に遲れて精わしからんよりは寧ろ之を速かにして以て拙なさの失を償ふことを專一とするものならん。

然れば凡そ大部大著の趣向にも差支へなしと云はれたる女流にして此の新聞雜誌の記者と相成らん爲めに不都合なきは論を待たざる事なるが、啻に之れに不都合なきのみか女流は恰も能く此類の仕事に適當するの性質多きものゝ如し、面壁九年の修行を積んで眞理を發見し初めて其思ふ所を書に記して世に公けにすると云へる如きは之れ或は當今の女性が得意とする所にあらじ、然れども時事に感激して烈火の如く燃ゆる所ろの情を寫し或は些細目前の事に注意して之を面白き短文に書綴り以て定期の印刷物中に載せて出版するが如きは寧ろ之に適當し且つ寧ろ多く愉快を與ふる所の事業ならんと思はる。

但し吾人は只だ女流が能く新聞雜誌の記者たるに適すと申して止むものにあらず其實更に一步を進めて當今の時勢此流の姉妹が奮發して自ら記者と爲られんことを必要とし甚だ强く之を勸め參らする者なり、試みに見玉へ今ま日本國中に存する新聞雜誌の數は眞に夥ゞしきものなるに之に加へて日に月に新たなるものゝ勃興すること春の筍の頭を擡ぐるよりも更に多

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きにあらずや而して此等の新聞雜誌は二三年來やうやく心附て女流の事を彼此と論辨するに至りたれども其論辨は大抵こと〴〵く男子の筆に成るが故に服を着けてかゆきを掻くの憾尠なしとなさず、然るに事の不都合は之のみかは其の女權論者と稱えて辨ずる所の議論を讀めば多くは是れ化粧したる男尊女卑の論あり其の女性の爲めに慷慨して之れが進歩利益を圖ると云ふ所の秘策を聞けば亦たこれ世の男子等が心を樂ませんとして一種の雛人形を新調せんと欲するに在り苟くも眞正の天理を知らん程の女流に取つてはさぞかし之れを口惜しく思わるゝことならんと存せらるゝに日本の文學世界いまだ一人の女記者なしと申さんと實以て遺憾千萬の沙汰には候はずや、古來人情の隱微を寫し筆力直入こと〴〵く人の心中を暴いたるは彼のシセクスピアと云へる西洋の淨瑠璃作者ならん然し若しウールソンの批評をして眞なりとせばシエクスピアが寫し得たる所のものは多くは男子の情なり彼の內に屆し易く外に現はれがたき女性の胎內に立入り千態萬狀の心中の思を發表したるは卽ちジヨルヂエリオツトと云へる女小說家あらずや抑も人情を盡す事シエキスピアの如きすら尙ほ女の情を寫す事女の記者に及ばずとならば現に今ま幾千年の間だ女子を奴隸と見たる男子の方々が一二年間に突然豹變して如何なる女權論者と相成んとも此人にしてよく姉妹方が心中に鬱積する思の丈を盡し得んと思も寄らず故に我國假令ひ今まエリオツト女史程の秀才を求め得ずとも切めては自ら婦人歎を草するの婦人あり自ら女子敎育論を論ずるの女子あらんと切望の至りにたへず。

但し吾人は只だ世の男子が女性に代つて能く其情を盡し得ざると申して止むものにあらず既に前にも論じたる如く世の男子は多年の習慣にはかに脫却しがたく年來の氣儘左程容易くは制することを得ずして差當り都合よき議論を述べて吾れは女權を主張するものなりと申さんとも其の極まる所は一變したる男尊論者の言のみ遂に今の女性に學文させ藝を仕込みて以て己が希望する一種の所云る良妻と爲さんと欲するに在るなり。左れば其の女子敎育と云つて女子を獎勵するの論及び婦人に忠告すると題して姉妹を諫むる所の議論には眞に自分勝手と思はるゝ箇條も之れなきにあらず眞正の女學に取ては殘念至極の事と云はざるべからざるなり。支那の經書詩經と云ものゝ中に螽斯の篇と題するものあり女子の嫉妬を戒しめて云ふ螽斯は物をそねむの情なければこそ子多く生れて其族は

増殖するなれ婦人も亦た此如く嫉妬の心をつゝしまば子孫の繁昌疑なからんと、或人之を以て謝氏の妻を諫めたる時夫人の云く之れは是れ周公と云へる男子が作つたる所の詩なれば則ち左様に都合よく女性を戒しめ玉ふべし世の婦人にして若し同樣の詩を咏ぜば男子が氣儘を制するの經必ず之より多かるべしと云へり。吾人は周公の賢を信じて疑はざるものと云へども然れども既に男子として女を戒むるときは勢ほひ尙斯の如き偏頗の論なしとすべからず况んや當今一時の流行に連れて口に女權筆に同權を主張し家に擂子木を以て細君を追ふ文明の紳士文人に於てをや、吾人はわが姉妹が斯の如き人の敎戒を聞かれんとを遺憾とするもの也。

吾人は幸にして男子に生れ亦た今ま不幸にして女性と申し得ざるもの也然れども自ら此等の說を爲して密かに沈思自省し悚然として恐懼し止まざるものあり、蓋し我國の文海に於て初めて女權論を主張したるものは吾人女學雜誌社々中の人なり顧れば明治十七年六月女學新誌第一號を出刊したるより此方一年を經て府下の各新聞紙上しきりに婦人論の流行あり之に應じて全國各地方の小新聞一齊に女權の論を叫び立てたり之よりして女學叢誌起り女學新聞起り女學叢誌一變して貴女の友となりいらつめ起り女子職業新誌起り女子を目的としたる種々の講義錄起り女子と男子とを併せて勸告する男女勸學新誌起れり此如く數多き女學の雜誌世に出でたるに係らず其編輯人はたとひ止を得ざるにもせよ悉く男子なり其投書家は何故に止むを得ざるか大抵は紳士諸君を多しとす如此して眞に女子の事情を訴へ眞に女子の敎育を主張し眞に女學女權の進步を計らんとす殘念至極の至と云ふべき也。

然るに顧みて西洋諸國及び特に如此き事に第一の進步を爲したる米洲合衆國内の有樣を觀るに羨やむべき者無限なり、彼のリチア、マリア、チアイルド女史が初めて子供の話を作りたる以來リヂア、シゴウルチー女史がハートフホルドプレッスの爲めに詩若干を作りたる以來マルガレットフーラー女史がホレースグリーレーが編輯する紐育トリビウンの爲に新書の批評を送りたる以來及びハルリエットビーチエルストウエ女史がナショナルエラへ向つて彼の有名なるアンクルトムスケービンの續物を投じたる以來女流にして新聞雜誌の記者たるもの莫大の數となれり、當今ハーパースバザールにはマリーブース（ウイルラルド孃其のハウッーウインに論じて云くブース女史の給料はハーバード大學の校長エリヲット氏及びパ

ーカーハウス料理店の料理番某と同給にて即ち年俸四千弗あり）女史ありセントニコラスにはマリーメープスドッヂ女史ありワイドアエークにはフハルナムプラット女史ありウーマンスジョウナルにはルシーストン女史及びアリスストーンブラックエル女史ありゼクリチツクにはジーチツトギルダー女史ありグードチーアにはケーテアプソンクラーク女史ありボストングローブにはマリーハッチ女史ありボストンアドバータイザーにはジョイホワイト女史あり紐育クリスチアンインテリゼンサーにはマルガレットサングスター女史ありインクワイラーにはハーヂンデビス女史ありデモレストモンスリーにはジンニージユン女史ありニウヨークトリビウンにはエルレンハッチンソン女史ありユニチンシグナル及びウーマンスジョウナルには婦人禁酒會の面々あり此等は何れも編輯長若くは編輯記者として世に著名なる方々なれども此外其名の少か之れよりも劣りたる人々及び各新聞雜誌の投書家として才名高き方々を擧んには其數果して幾千かわからん彼地の女流の此業に活潑なる實に驚くに堪へたり。

而して我國は未だ一人の女記者なく亦た一人の女編輯長の管理せる新聞雜誌なき也、然れども事の驚くべきは豈に啻だ之れのみならんや、新聞紙條例第七條に云く

内國人にして滿二十歳以上の男子に非ざれば持主社主編輯人印刷人となることを得ず

あゝ日本の文學社會は未だ女流の編輯人を出現せしむることを許さゞるか、曰く決して然らず、我同胞姉妹にして未だ自から奮つて此任に當るものなきが故に則ち國民の鏡として此の法律あり、國民の寫眞として文海にかゝる悲しむべき現象あるもの也。

## ●論説

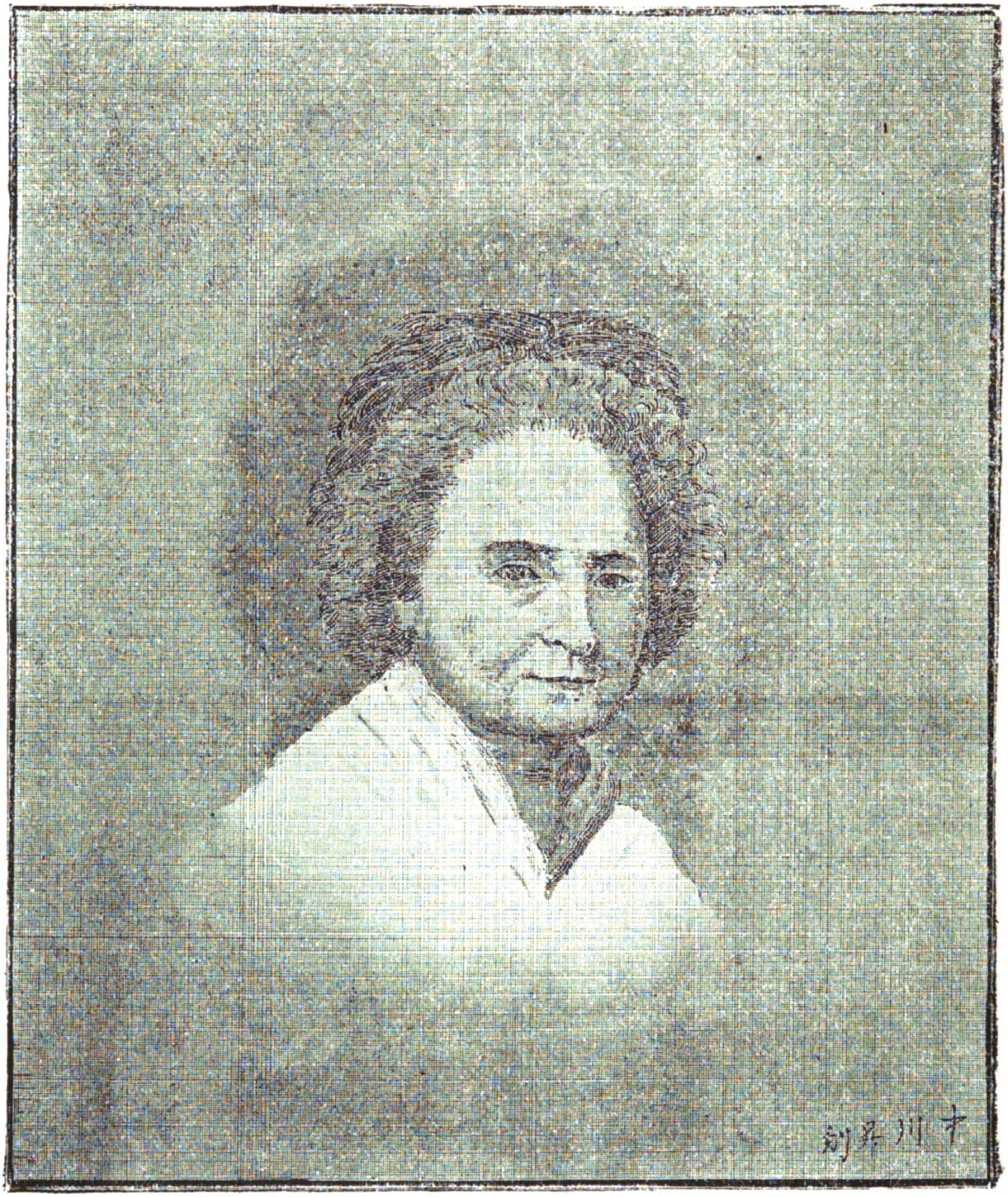
### ○良人に告ぐ

女學雜誌編者　演述

山村亨作筆記

世上の良人諸君、殊に西洋夫婦の交際方を御聞き及びに成つてどうか其樣なる習慣を行なはせたいと望まるゝ所の良人諸君、私は諸君と縁もゆかりも無ひ男で大方は未だ一面識の知已でも無ひものであるに、此度何故かく大業に此紙面に立ち現はれ諸君に一言の辭を呈するかと云ふに、過る頃ろ私は少さか時事に感じて細君に告ぐると申す演説を致し其筆記を此の雜誌の上に掲げました所ろが其翌日より無名の手紙が大層

マルタ、ワシントン夫人の肖像



大統領ワシントン公令閨

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

女學叢書 木村鐙子小傳

右は編者が明治女學校生徒の爲に編著したる者なれども尙ほ殘部有之に付一冊十錢郵税四錢を送らるゝ諸君には呈送すべし

東京新橋日吉町

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に參りました、固より性名が無ひから何方よりとも分りませんが其筆跡と文言とに由つて考へまするも確かに女の方に相違ない、然かも夫があつて夫に多少の言ひ分があると云ふ一僻ある相ある方々に相違ないと見止めました、所ろが其文言の大畧に貴樣は細君に告ぐると云つて大層われ〳〵女供にいろ〳〵の注意がましひ事を申し斯うもしたらば一家の幸福は莫大であらうなどと意見ようの議論を述べた、一應は尤もと聞上げて幾分かは承知する所もあるが、何分女さへ溫和しくして妻の方から夫を愛しさへ致さば則いち夫婦間の和樂は極まりあひものゝように考へらるゝは大層の間違である、吾等は元來女で何も事を八釜しく申さうとの考は毛頭ない、成べく夫を愛したいとの考は狹の胸の內にもみち〳〵てある、然るに何如に自分で溫和しくもし愛しも致した所ろが肝腎の夫の方で其の心得が無ひから兎てもそう甘まく行くものではない、夫れ故へ私供へ何かと云ふて下さるは反つて左程ありがたいとも思ひませんから何卒其の筆鋒を世の男子の方へ向けて苟くも夫とあつて一人の妻に添ひたらん程のものは是非これ〳〵の事は致さないではならんと云ふ事を論じて下さい其方がイクラ効能があるか知れません、と先づ斯樣な主旨で御座りまして、不思儀なとには數多の手紙の意味が略ぼ此の一點に歸するように思はれました。夫故私はつら〳〵と深思熟考いたし成程細君方にばかり申上て其の夫の方へ何等の事をも述べませんときはツマリ思ふ丈けの和樂說も行はれますまい、又た第二にはたゞ〳〵女方をのみお責み申して男子の方は勝手にさせて置くと思はれましては甚だ不本意の至りと存じ、それゆへ此度諸君にも一應愚考する所を述べまする次第、どうぞ惡しからず御聞下さるよう預じめ願ひ置たい。

扨て斯うお知己に成りましては最早何も荒だてゝ書生論を申すともありません、つまり諸君即ちあなた方と折入つて御相談を致し御同樣細君に不平心を起させないように、左らばとてどうか氣儘を申させないように、之と交際するの方法を承知したいとであります。元來お互ひに家を作りまして細君と同居いたし一日の侶一年の朋友一生の道連としてもろともに交はりまするからは、勿論互に心限り愛し合つて若しわがッマが無くんば兎ても世にながらうべき甲斐はないと思ふ迄に立ち至りたいとであるですが、夫れには先づ何如いたしたらば宜しからう。諸君、その私は初めから考へましたテ、どうか細君は何事でも唯々と云つて私の言を聞て吳れまして万事万

端私の旨に逆られずたゞ私と云ふものを其心の中に充満させて決して餘所外を省みないと云ふようにならせたい、と斯く思ふたヿでありましたが、どうも之れでは骨がないホンの軟らかなるものが自分の思ふまゝに形ちづくらるゝと申す計りで實際 私の助けには少しもならない、成程斯様の妻が在ましたらば別段肝癪の起るヿもありませんが、其代りに私の足らない所を補なつて私の出來ない所を足すと云ふ眞正の助け手たる資格が御座いません。何か私が心配をして歸りまする と妻は定めし一層心配して氣を落しませう、何か腹を立てゝ歸るヿがありまするとほんとうに困りましたものと計り云つて其外の慰さめはありますまい、何んと是はどう仕様かと工夫をするときにも、サアと云つて返辭がない、お前コンナ事を爲ては成りますまいと云ひまするとたゞシク／＼と泣いて何んとも辨じません、之はかう爲なくては成りますまいと云ひますと唯と云つて左様します、去まして出來ませんと其儘だまつて居ります、何うも是では甚だ不甲斐ない不活潑なヿで兎ても私供には面白くありません。其上當今外向へ出歩るきまして色々の宴會へも同伴しましたとき向うの紳士が西洋めかして談しを仕掛ましたときに、たゞヘエ／＼と云つて無暗に點頭を仕たり、顔を赤くしてもぢ／＼仕たり、もつと嚴粛にして呉れゝばと思ふ所で八鱈に腰を抵う仕たりなどされますると、甚だ氣が引けまして成らんです。それゆへ元より温和しいと云ふは私供が非常に好みまする所の女徳ではありまするが餘まりヲトナシすぎて飴で作つた京人形のような細君はどうも幸ひなるホーム(家)を作るには適當しないヿと思はれるですが、諸君のお考は何如で御座いませう。

然し諸君が右第一種のようなる細君を好まるゝとならば左らば其の御自身の成された方も別段六かしくはありますまい、然し諸君はミルの夫人が夫を助けた、フホーセットの夫人が夫を案内した、ワシントンの奥方は大統領を補佐した、と斯く西洋の事實にある面白い談をきくと固より之を大層に好まれて一も二もなく世の妻たるものにコンナ心得方を持つたが善いヿと申さるゝヿであるですが、さようならば諸君もどうか右の如き賢夫人の夫と爲つたる人々の覺悟をお學び置かれたいヿと存ずるです。苟くも細君の助けを欲すると申しまするならば是非細君の言はるゝヿを有がたしと謝して受入れ又た其の細君の爲て呉れらるゝヿを有益なる助けと感じて承知しなければならんです、然るに既に妻の助けを受るは眞に樂し

ひとであると書物の上では承知しながら、實際細君が何か申して呉れると「お前が何を知るものかい」とはねつけて少しも受け附けません、細君が何か心配をして斯うもなすつたらバと云つて呉れまするト「兎角どうも女はさし出口で困るどうも女の智慧と云ふものは淺墓なものでホンノ目先の事だけしか分らないで困る」と云つて一應の禮も申しません。よしたとひ其の注意は宜しくないことでありませうとも、既に夫を愛し夫の爲めを思へばこそ斯うもあゝもと申すのであるに其言を採らざるのみか其志をも感謝せずしてツキかへします、之れ甚いだ夫たるものゝ道を得ないことと考へるです「お前の言ふとは成程尤もだどうも左樣なくては成らんです、ダガネ此處に斯う云ふ不都合があつて兎ても其樣には參るまいからネかうしたらばどうでせう」とかく信切に相談して見玉へ、第一細君は夫を思ふ眞心丈けは通じたりと思ひて甚いだ喜ぶるゝことでせうが之を喜ぶと同時に夫を思ふ愛心は即ち一寸づゝ生長して參るです、第二ろの時細君は成程そう云ふことが在りませう兎角女には分りませんものでと夫の智慧の深い所をも感服していよ〱夫を敬する所の念も起りませうシ又た自分の心得にも成つて自然其の才力を增す所の助けにもなりませう。然るに細君が申さるゝことを少しも受入ないで遂には兎ても女などには分らんと獨り極めを仕て、何事でも自分一量見で考へて自分の一量見で實行します、だから細君は元來夫が何を思ふて何を爲て居るかと云ふことを知りませんから、固より之を慰さめようの仕方もなくまた夫が胸に在る万斛の歎きを酌み分けることが出來ないです。すると細君は少しも吾を慰さめて呉れん少しも私の心を察しない、どうも西洋の婦人のような軟らかなる心得がないと云つて歎息しますが、之は諸君どうも私供男子のあやまちかと考へまするから何卒其初めをつゝしんで万事細君に相談するように致では何如でせう。特に日本の男子は女の助けを得たと云ふことを何かはづかしき事のように思ひまして妻の內助が在つても之を秘して何んとも云ハん、又た之を秘くしまするから隨がつて妻の助けを表向き受入れないような風附をして自分で英雄を氣取る甚いだ憫れむべきものかと存じます、支那の歷史を讀みまするど婦人の言葉を聞なければ天下は治まるように書いてあります、日本の豪傑の傳を讀みまするど婦人を顧みない妻をほつて置いた四十七士は細君に相談しない、ダカラ其大業が成就したと云ふように書いてある、夫是より細君の內助を人にも秘く

し自分も表向き受入れないようにするものかと思ハるゝですが此の東洋風はどうか早速に止めて貰ひたいと考へます。彼のプライニーと云ふ人は叔母さまの所へ自分の細君の事を大層にほめて遣りました、ルーテル程の豪傑でも細君の德を頌して平生皇帝のケテさん、主君のケテさんと云つて妻の名を呼んだともあり、自由の劍を揮るつたるハムブデン程の英雄でも打死するときは遙かに妻の居た鄕を望み恨めし相に戀ひ慕たつて馬頭に倒れたと書いてある、何も細君を愛すると細君の德を懷ふとを人に隱くしません、西洋人が公けの演說中にマイ、デア、ワイフ(吾が親愛する妻)と云ふとは多く聞きますが日本の方のように愚妻荊妻と云ふよふなる例しはまだ聞たとがないです。それゆへ苟くもミルの夫人フホーセットの夫人及びワシントンの夫人の如き賢夫人を欲しひと仰せらるゝあらば先づ此等の夫人の夫たる覺悟を養なつて其の細君を敬愛するように成されたい。細君の言葉に善い所があれば非常に之を感謝して其通りに實行しまた世間へも公けに之を風聽なさい。又たとひ細君の言葉に十分の善い所がありませんとも其志を採つて信切に之を謝し細君の愛情をして達する所を得せしめらるゝように致したい、諸君何んと斯のやうに覺悟するとと定めましては何如でせう。

此外に未だ御相談したい所がありますが追て後の號に於て改めて申上るとでありませう。

○

## 婦女權利の沿革(其四)(特別寄書)

穗積陳重　講述

第三婦女の後見　「人生て婦人の身と爲る勿れ、一生の苦樂ハ他人にあり」とハ慥か白樂天の詩であると記臆して居りますが、是れハ能く古代婦人の法律上の位置を言ひ顯ハした者で、何れの國の法律にても、古代ハ婦人を他人の支配の下に置きしものと見へます、支那にハ三從の敎ありて、家にありてハ父に從ひ、人に適きてハ夫に從ひ、夫死してハ子に從ふ、を法と致しました、又前にも述べたる、世界最舊の法律書印度「メニュー」の法典第九編にも、左の如き法文があります

第二章、凡そ婦女たる者ハ、晝となく、夜となく、其保護たる者に服從すべし。

第三章、幼けなき時ハ、其父之が保護者たり、若き時ハ、其夫之が保護者たり、老たる時ハ其子之か保護者たり、凡そ婦女たる者ハ、獨立の狀態に適す可らざるものなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

右の法律は支那の三從の敎を恰も符節を合はすが如くであります。

今少しく談話を西方に轉じ、歐羅巴諸國の古代法を說きませう、歐州諸國の法律の基礎となりたる羅馬法にても、亦た支那印度と同じ現象が我々の眼に遮ります、羅馬法に於て、婦女未だ他人に嫁せざる時は「ポテスタス」即ち家長權に屬す、嫁するの後は「マヌス」即ち夫權に屬し、夫死するの後は「チューチラ」即ち後見權に屬し、右の三權の下に一生涯を終る者とす、依て法律語に、此狀態を「ペルペチュアル、チューチレーヂ」即ち永久後見と稱しました、又「ガイヤス」の法律書第一篇第百四十四條にも、「男子は適婚齡ニ達スル時ハ後見ヲ免除スベシ、女子ハ適婚齡ノ前後ヲ論ゼズ生涯ノ後見ヲ要ス、是レ他ナシ、古人ガ婦女ハ智力ノ薄弱ナル者ナリト思ヒタルヲ以テナリ」とあります。

斯の如く、支那印度羅馬の古法は皆な婦女は生涯他人の後見を受くべき者に致しました、然るに右の三法族中、特に著しき進步を爲したる羅馬法にては、追々に婦女永久後見の法を弛るめ、婦女に獨立の位地を與ふるに至りました、「オーガスタス」帝の時、帝は羅馬帝國の人口增殖を奬勵せんが爲めに、「レキス、ヂュリヤ」及び「レキス、パピヤ、ポピヤ」と云へる有名なる法令を出し、生れ乍らにして自由を有する婦人にして三子を擧げ、又は奴隸解放によりて自由を得たる婦人にして四子を擧げたる者は後見を免除すべしと定めたり、是れが羅馬にて永久後見法の破るゝ端緒であります、其後「クローヂヤス」帝の時に婦女が男系親の後見を受る法を廢し「ジャスチニヤン」帝の時に至りては、婦女永久後見の制は全く跡を斷つに至りました。

羅馬法に於て婦女は既に自ら後見を免れたれ共、未だ自ら他人の後見人となる事は許しませなんだ、然るに現今歐米諸國の法律にては、婦女特り他人の後見を受けざる而已ならず、自ら後見人となるを得るに至りました、例へば佛蘭西伊多利獨逸諸國の民法にて、母は自ら其子の後見人となり、又は他人を選んで其子の後見人と爲すの權あり、英吉利の法律にても、母は「ガーヂヤン、バイ、子チュアー」自然の後見人、又は「ガーヂヤン、フォール、ナルチュアー」養育の後見人などゝ稱し、自ら其子の後見人と爲るを得ます、又佛蘭西民法第五百七條に依れば、夫たる者、若し瘋癲白癡狂疾等にして治產の禁を受けたる時、其妻は夫の後見人と爲る事さへも許すに至りました。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

右に陳べたる婦女後見法沿革の要領を撮んで申せば、古代の法律によれば婦女ハ永久後見の下にありて一生涯他人の管理を受けしも近世の法律にては男子と同じく幼年の間若くは瘋癲白痴の時のみに後見を受くるに至り又古代は自ら他人の後見人と爲るの權なかりしも近世に至り後見人たるを得るに至りました」次に婚姻法の話に移りましやう。（未完）

## ●叢話

○秋夜の怪談（第三）　櫻田優香里

辨慶なほも語を續て一躰女と云ふものが家の内より外へ出て男子と一處に物事をやつて見ようと思ふが第一不量見、智力と申し躰力迄なんじよう男子に及ばんや、其上つまらぬ事に氣を廻し、些細な事を心配し、嫉みそねみの情強く、我儘勝手の思ひ深く、氣の弱ひ女は意くぢなく、氣の強ひ女は強情過ぎる、如何に女の肩を持ち女の世話を厄介者め、男の僻にこのやうな下等な動物を對手にしてさわき立つる大馬鹿者とおぼろにかすむ月の外訪ふものもなき庭の面に、不風流なる大聲にて喋り立つる辨慶の惡口を口惜しくは思へどもなまじひに口出 ゝてまた頭をば叩かれんには日頃よりの腦病がなほ一層強くなりもやせん、かなわぬ迄も喰付てなりと腹を愈んと、思ふ心を壓しづめしばしがうちは物言はでありけるを辨慶は得意となり、亦もや何か語り出でんず有樣なりしが、フトゆかりが後邊を見やり何やらん臆したる面色してぞ扣へたり。太公望も頭を擡げ矢張ヂット打守り奇し氣なる樣子故優香里は餘りの不思議さに何事やらんと見かへれば、こわそも如何に何處よりか來りけん年の頃は二十前後とも覺ほしき婦人が雪を欺く計りなる白衣を着し、腰に玉の帶を結び、胸より肩の邊迄いろ／＼の寶石を以て飾り金色の髮を振亂し手に一振りの劔を提げたるがゆかりが後ろに突立たり、其容貌を如何と見れば眼光凉しけれども何となく人を射り鼻高く口元優に頰は少しく瘠けたれども色飽迄白きが上に少しく青色を帶びたり。此時一天の水氣忽ち晴れ渡り月色皎々として彼の乙女が容貌と服裝を照らせば美と云の定限は經過し去りて、寧ろ慘しと云ふべきか、心中何か不平の念あるにや柳眉星眼これを取次て少しく逆立ちたり、乙女はやほら二三歩前に歩み出で少く語氣を激しくし如何に辨慶とやらん法師先刻よりの御身が議論木間がくれに聽聞せり、さりながら片手打なる申されようと、思はず失笑仕れり、我身女性にては候へ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ども、正義を重じ、國家を愛し、君に忠を盡し、親に孝を以て仕へ、朋友に信を以て交り、眞理を以て身の楯とし、千軍萬馬もものゝ數とせざること世の男子に劣るまじくと自信せり、かく申さば餘りに上を知らざるしれものと、卑下する人もあるならんが、天下は決して男子の爲めにのみ造られしには候はず、女子たる者が世の中にいろ〳〵の働きを致さん事が無用なれば、如何に女流が骨折りたりとも天は其成功を許さゞるべきに古へよりして數へも盡きぬ婦女達が、男子も及ばぬ偉業を建しを見れば婦人の働きは無用ぞと頭より申されまじ、御僧の如き暴法師もルーテルが申せし如く女によりて孕まれ女によりて生まれ、女によりて養はれし人なるべし如何に偏屈頑固なる封建時代の坊子とて此等の道理が理解らずや、聞く倭の國建國の祖は天照太神とか申す女性のよし、唐土の上古に女媧氏あり希臘の昔しセルス、ヴェスタ、ダイアナ、ミネルバ、ブヒーナス、ジュノ、等の女神あり未開の世界に於てすら女を崇めし例あるをこれ等のことを考へもせで、なまもの知りの女をば咎めだてする愚かさよと言短かにのべたるを、聞く辨慶は拳を握り飛も附かんず有樣を太公望はしつかと押へ目配せなして、乙女に對ひいと鄭寧に申すよういづくの貴人におわすやらん苦しふなくば名乗らせ賜へと云へば乙女は小腰を屈め、あの法師武者がいろ〳〵とわられぬことを云はるゝにあまりの事と腹立たしく思はず失禮致し侍る、名乗るは何となう恥かしう覺へ候へど御尋ね故に申上げん、妾は此處より數百里隔たりたるフランスの東北なるドムレミーとなん呼べる村に住ひせし農家の小娘に侍るなり幼きより貧賤に人となりふみ讀む術ものかく業も敎へられしと云ふにはあらねど田圃の務めに閑あれば宗敎上の書物など繙きしそが爲めに少しの理屈は心得侍り、さりながら年長け賜ふ大人の御前をも憚からず聲高かに諭らひ候事今更鈍ましく覺へ候なり必ず笑ひなし賜ひぞとはじめの勢に引かへて顏赤らめしぞ殊勝なりける。

ゆかりは傍よりこれを聞きくだんの乙女に打對ひ手に寶劍を携へらるゝ事と云ひドムレミーの村に住ひ賜ひしと云はるゝからわ察する處そのむかし、明日をも待たで落ちんとする、オルレアンスの英軍が、圍みを解てヘンリーを、帝の位ひに附け賜ひし、愛國者と名の高き、ジョン、デ、アークにておわすべし未だ年若き女の身にて一國の安危を身に負ひて修羅の巷に兵を指揮し世界の男子を愧死せしめ女流の榮を彌增せし其働き

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の係ある事、五條の橋で暴れたり安宅の關にて苦しんだり、衣川の淵にて立往生をするやうな大男とは比べものにはありがたし（此時少し鬱打ちせし心地せりと）云へども。くだんの乙女は耳にもかけず、やがて辨慶に打向ひ、法師先刻よりの我言葉腹立しうや覺されん、我れも御身がいろ〳〵と女流の惡口云はるゝに心の内怒りの思ひに堪へざれば、思はず言を過し侍りいかにも優香里が察しに違はず妾わジョン、デ、アークと呼ばれたる賤女よて候、やよそこな翁申すも嗚呼なる事ながら英國軍の專橫あるに民の困しみ一かたならず國の滅亡も近きにわらん猶豫あす可き期に非ずかよわき女なりとても國を愛する眞心は神も輔け賜ふべしと、思ひ立たる回復の事業は千辛萬苦のそのうちに望みの如くなりはべれど、身は一邊の煙りのうちに、登る雲井の榮も得ず、燒殺されて候ひしが今の世迄も人ゞが憐れジョンがなる果よと、吊ひ賜はるその情にいさゝか心を慰め侍りさりながらと、說き出さんとして暫らくヂット睛らひたり。

〇一休和尚の母

一休和尚の母君末期に一休和尚へ贈り遣さるゝ文の寫しとて學丹翁の持傳へ居らるゝを借りて記す其文に云く

我等娑婆の緣盡き無爲の都に赴き候御身よき出家に成り玉ひ佛性の見を磨き其の眼より我等地獄に落るか落ちざるか不斷添ふか添ハざるかを見玉ふべし釋迦達磨をも奴となし玉ふほどの人にあり玉ひ候ハゞ俗にても苦しからず候佛四十餘年說法し玉ひ終りに一字不說と宣ひしは我と見我と悟るが肝要に候何事も莫忘想あなかしこ

九月上旬　　不生不死身

千菊丸どのへ

かへす〴〵方便の說のみを守る人は糞虫と同じ事に候八万の諸聖敎を空らに讀ても佛性の見を磨かずんば此文ほどの事も解しがたかるべし

これとてもかりそめあらぬ別れてはかたみとも見よ水莖のあと

〇塩原入浴の記　　鈴木弘恭

十三日天氣のよきに須磨といへる所に湯瀧あり道のほども遠からねバゆき給ハずやとあるじがいへバそれよけんとてやがてやどの次郎をわあいとしていでつ」門前といふ所より右に折てあやしき柴橋をわたりわぜをつたへやう〳〵に山路をわけゆけバ七八町バかりにてゆきつきぬ浴室に入れバきゝしに

たがはずやり水の如くに樋をかけたる口より六筋ばかりの温泉たぎりおちたり人々かしらにまれてあしにまれ心のまゝにうたしむるはいと心ちよげなればおのれも人まねするほどに手足とみにすが〳〵しうなりぬ」さてこゝにてすまきだんごといふものをうりひさげばいかなるものにかとてひとつもてこといへばへいなどいひてさてもてきぬこはしろきだんごなるがまろくはなくて手のはらもておしひしぎて三角のやうにしたるを青き柏の葉をしきたるうつはものゝうへにもりてきなこといふものに砂糖をすこしくはへたるがかたへにありまたこなたにはきよらかなる萱のくきを五寸ばかりにきりてはしのかたをなゝめにけづりたるもの一本ありこは箸は用ゐずしてこれにさしつらぬきてくふなりけり味はひはあしくてなかく〳〵にくふべくもあらねど三つばかりはたうべてのこりを次郎にとらせつ次郎はいとよろこびて三人ばかりがれうをおのれ一人してたうべつくしつ腹ふくれたりやとゝへば左もあらずとてわらふさていにしへは食をもるにはみなかうやうにしたるなり今も大嘗會のおほんとき御食をもるにはみな柏の葉にもるなりかしはといふ名も食敷葉のつゝまりなりすべてかゝるかた山里にこそいにしへのふぞくの今も殘れるなれと

思へはそゞろに當時のとの忍ばるゝはれいのくせなりと我ながらをかしあないのものはなにともおもへらねばだんごだにくらへたまはぬをとくかへるべいなどうながすもまたをかし」やどりにかへりてひるのけたうべてまたそゞろありきす古町の南にとなりて箒川の橋のかなたを門前といふ鹽がまより古町への街道なり妙雲寺といふふるき寺あればその門前といふ意にや人家二十あまりありて古町よりうちつゞきて市町のさまをなせりすなはち寺にまうでゝ緣紀めくものをみるにこは禪宗にて小松重盛のおとゞの姨母公妙雲尼の開基なり本尊は西天竺毘首羯摩天がゑられたりし栴檀の木の靈像にておとゞのつねに歸依し賜へりし本朝三釋迦の一つなり壽永のむかし平家西海にいくさやぶれてうからやからちり〴〵にはふれさまよふときに鎌倉どのよりその人々をたづねもとむることいとせちなりければ天の下には身をいるゝの地なかりき然るに平家の侍筑後守入道貞能はもとより宇都宮朝綱にちなみあれば尼公をいざなひて下つ毛の國に下んとするにこの靈佛はおとゞのことにめで給へりしをもて笈の中にをさめてみづから負來りて朝綱によりてさてあひはかりけるに朝綱も鎌倉へのきこえをおそれてさすがに家にもとゞめずはるかに藤原の山

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

中に送りて跡をかくさしめき貞能尼公をともなひて藤原に來りつれど山ふかくして里ちかゝれバ人のとたえたらん所にと思ひてつひにこの鹽原の山おくにわけいりて草の庵を結び靈像をこゝに安置して朝夕のつとめおこたりなく平家の人々のなきあとをとぶらひ給ひつゝ年月をへて尼公身まかりにければその名をやがて寺の名として甘露山妙雲寺となんいふとぞ妙雲尼の墓ハ今に寺のうしとらの隅なる瀧の上にありて九重の石塔あり文字ハ見えねどもおのづからふるびたるさま鎌倉ごろの物なることはうたがふべくもあらず」此所をいでゝ河原の湯といふにゆあみしてかへりぬこの湯は門前の西のうらにて箒川の河原にあり」

〇子供を育つる心得の事

英國の哲學者にて現今日本の學者仲間に尤も有名なるスペンサーと云へる人が申したる言に、今ま玆に算盤又帳面の附け方などを知らずして商賣するものあらば孰れにても之を笑ふとなん若し亦た人の身躰骨格の理合を知らずして外科醫となるものあらバ誰れにても之を危うしとすべし然るに世の父母は子供の躰はどの樣に發達するか其の智力は何如やうに伸び進むか其の道徳は抑も何ようにして生長するやと云ふ極々敎育の學に大切なる一と通りの道理をも知らずして大切の子供を勝手に育てんとするは何人か之を笑ハざらん否な何人も之を笑うまじ則ち何人も之を危ぶみて掛念心配すると限りなかるべし。思ふに世上幾万の子供は其兩親が育て方を知らざるよりして死するものならん、亦た幾百万の子供は兩親が育て方の理を辨へざるより甚だ介弱きものとならん、然らざるも幾千万の子供は兩親が十分に其育て方を心得ざるより元來發達すべきほどの地位にも達せざるとならん、何れにしても殘念至極の事と云ふべし、然るに世の兩親は愚かにも子供の頓死を免れがたき天の不運と泣き悲しみひたすら罪を空に歸して自から省みざると以ての外なり、此の子供を殺ろし子供を介弱く爲たるの罪は十に八九其の兩親たるものが敎育の理を知らざるに起ると云ハねバ相成らず、其外娘子に音樂琴鳴物の類を仕込み又は徒らに地名人名の暗誦に骨折らせ其外に必要肝腎の事を疎んじ乍ら扨て成人したる息子息女に對ひな前はどうも其樣なる心得方にてはならぬから在ては學校の敎育と云ふものが甚だ怨めしひなど考ふるものあり、人を責めて自身を顧みざる無知の父母と云ふべきなり、と先大意は斯ように痛論して大に兩親が敎育學を承知するの必要を說れた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り希くは世の母たる者子供を教育するの任多くは諸君に在り能く此の忠告を心得て平生子供の育て方を學び置かれんとくれ〴〵も國家の爲に大切なり。

## ○批評

### 浮雲の褒貶（其四）

石橋忍月

著者ハおぼッちやまなる文三君と文明の空氣を逆飮して氣管でなく食管を傷めたるお茶ッピイの淑女即ちお勢孃との關係の色合ひハ餘程勢的に寫されたり余ハ大に合點の行かぬ事あり試みに其點を擧げて著者に質問せんと欲す夫れ文三ハ親孝行なり、そハ文三が幼少の時「年齡に増せた事を言ひては兩親に袂を絞らせた」事お政より小言を頂戴する時「母親と聞いて萎れ返ッた」事及び文三が下宿せんとて荷物取片附け中「机の抽斗を開け中に納れてあッた年頃五十の上ゆく白髮たる老婦の寫眞にフト目を注めて我にもなく熟々と眺め入ッた」等の事實に由ッて證するを得るなり又お勢ハ親に對して不敬なり親を嘲弄し親を輕侮し親を罵詈す手短かに言わバ親不孝のテッペンなり彼の親孝行なる文三にして此親不孝なるお勢を戀ひ慕ふ「志かもその戀ひ慕ふの甚しきお勢の一ニッコリは文三をして萬愁を消し千憂を拂はしむるに至る嗚呼此の戀ハ如何なる者なるや余其所以を知る能ハず且つや文三ハ貧苦に成長し種々樣々なる辛苦艱難氣兼心配を嘗め來り終に內端なる氣の小なる正直なる丈夫となりたるものなり又お勢ハ關係的に富貴に育ち幼少の折より挿頭の花衣の裏の玉と撫で愛まれ何でも彼でも言成り次第にヲイソレと仕附けられたが僻と成つて首尾よくやんちや娘に成果せたるものなり故に此兩人の性質の相異なる恰も氷炭相容れざるが如し然るに文三ハ性質と言ひ親に對する行爲と言ひ丸で己れと反對なるお勢を戀ひ慕ふハ余益其所以を知る能ハず斯る戀ハ果して成立し得可き者なるや余は裁決に苦しむなりよしや此戀ハ只々姿容のみを以て成立したり故に他の性質行爲ハ毫も問ふに及はずとするも熟々考ふる時ハ又大に不都合あり何ぞや曰く著者が文三を以て啻ゞお勢の容色のみを愛したりとせず、其志操をも愛したるが如くに寫したればなり例之バ文三が「二十三にもなッてお袋一人さへ過しかねる其樣な不甲斐ない私を辨護して母親さんと議論をなすッたと實に……………實に嬉しい」と言ッて膝の上へポッタリ涙を下すが如き又文三が日本婦人の有樣束髮の利害男女交際の得失抔を論じて初めて此の戀の基が固くなッた樣に記されしハ其證據となして十分勢力ある者なり故に予ハ斷然言はんと欲す「著者ハ成立し得可からざる戀を成立せしめたり」と著者以ッて如何となす

浮雲の全編は其主人公たると賓客たるとを問はず總て平凡なる不完全なる人物の集合にして其脚色を組織する者は此の平凡なる、不完全なる人物の行爲なり著者が此行爲此人物を畫かれしハ大卓見にして予が敬服する所なりと雖も平凡なる不完全なる人物行爲を寫すと共に著者の觀察にも亦た不完全なる點あるは玉に瑕小町にあばたと謂はざる可からず其瑕其あばたと云ふハ即ち編中主人公の一人なるお勢孃が文三に對する行爲の奇々怪々なる事是れなりお勢の動作ハ意想外にして能く文三を生死せしめ能く讀者を玩弄す而して讀者中或ハ其動作の目的ハ何邊に在るやを知らざる者無きにしも非る可し何となれバ意思を寫すゞ於て不完全なれバなり（余ハ假りに動作と意思の併動を行爲となす）余ハ推量の力を以てお勢の意思ハ何の點に在るやを知らざるに非ず即ち强いて著者の筆先きの方向を知覺したり故に余ハ此推量を以つて的中せしものと假定しお勢が文三に對する行爲の奇々怪々なる所以を說かむ

意思ハ以つて動作を推す可からずと雖も動作ハ以つて意思を推すを得可し今お勢の動作を以つて其意思を推さんに文三お勢對話の時文三ハ「私にハ……親より大切な者がありますが……」と思ひ切つて訥りながら言へバお勢ハ平氣で「親より大切な者……私にも有りますワ、人ぢやアないの、アノ眞理」と言ふが如き又文三が「死ぬより辛いおもひをしておても先でハ毫しも汲ンで呉れない寧ろつれなくされたならバまた思ひ切りやうも有らうけれども……」と些し聲をかすませて「なまじひ力におもふの、親友だのといはれて見れバ私ハ……どうも……どう有つても思ひ……」と熱氣となりて言へばお勢ハ知らぬ顏の半兵衛で「アラ月が……まるで竹の中から出るやうですよ鳥渡御覽なさいヨ」との返答の如き此を推し彼を考ふれバお勢ハ果して文三を愛するの意思なきか否や决して然らざる可しお勢が用もないのに文三の室に上り込むハ果して何故ぞこうからんだ水向け文句「仰しやらぬとくぐりますヨ」とまで迫るハ果して何故ぞ文三の顏見る毎にニッコリ笑ふハ果して何故ぞ眼鏡を外して頭巾を取り急に女性らしく成るハ果して何故ぞ母に向つて文三を辨護するハ果して何故ぞ此動作ハ文三を愛するの意思有るを證するに足る然れども其愛の起源ハ眞情に非ずして情慾なり故に一人の動作に二樣の意思あるが如しとハ是れ著者の本心なる可しと雖も予ハ敬服する能はざるなり凡そ女の男に對して意あるときハ意思餘りあつて動作足らず若し意なきときハ動作餘りあつて意思足らず意あるときハ己れに幾分の弱みあり故に如何なる莫連も思ふとの四半分一も言ふ能ハず意なきときハ十分の强みあり故に如何なる温和なる者も十分の者は十分乃至二三十分ゞも言へるなり今お勢が文三に對する動作を見るに言語ハ十分の者ハ二三十分にも言ひ廻ハして輕淡流暢、擧止ハ荒々しくて粧飾せず曾て羞赧の美容面を呈せず亦た曾て可憐の腸心姿を送らず然らバお勢ハ意なき者なるや否なお勢ハ十分に意ある者なり請求ある者なり心に弱みなかる可からざる者なり故にお勢ハ「意思餘りあるも動作足りず」と云ふ狀態なかる可からず然るに著者の作られたるお勢ハ「動作餘りあつて意思も亦た餘りあり」と云ふ古今未曾有奇怪不可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

思議の行爲を現せり著者或ハ辨駁して曰ハん「眞情を以て他を愛する時ハ汝の說の如くならざる可からず然れどもお勢の意ハ眞情に非ずして情慾なり故に汝の說ハ玆に適用す可からず」と余ハ反駁して曰ハんと欲す「其眞情と情慾とを問はす他に向つて求むる所あるハ同一なり心に弱みあるハ同一なり何ぞ動作の發現に於て著者が寫すが如き差違を生せんや」と是れ予が著者の觀察に不完全なる點ありと謂ふ所以なり

年配五十前后の老人が一心に算盤を彈いてゐる時不斗除法の呼聲を忘れ」エー六五七十の二…でもなしとエー六五」と心配さうな顏を振り揚げて其僻口をアンゴり開いて眼鏡越しにジット文三の顏を見守め「ウー八十の二か」ト一越調子高な聲を振立て、又一心不亂に彈き出す時著者ハ文三を以て「餘りの可笑しさに堪へかねて覺ねずも微笑した」と言はれたり是ハ極些細なる事なれども此の微笑したると微笑せざるとは其人物の性質に大關係ある者故予ハ一言を費さゞるを得ず文三の性質にてハ中々以つて老人の心配、難義を見てうそにも笑ふ樣なる人物に非ず予ハ文三幼時の境遇と母に對し叔母に對し阿勢に對する行爲とを以て其人となりを推せバMelancorisch の人物なりと思考す此微笑の一事ハ Sanguinisch 的の人物なれバ兎も角も文三にハ出來ぬものなり此の塲合にてハ「餘りの哀さにたゞ兼ねて文三は覺ばへずボロりと淚一雫」と言ふが當然ならん若し可笑しさに堪へ兼ねて微笑する樣なる文三なれば何ぞお勢よりやいのくと責めたてられて重くろしく折目正しく居すまつて鹿爪らしく思ひのたけを言ふが如き石地藏の所爲あらんや又何ぞお勢をしてツイと彼方を向いてアラ鳶が飛でますヨと言はしむるが如き表裏の飄蕈あらんや(友人傍に在つて曰く君の評ハどうも殘酷だ子」と)

浮雲の全篇ハ徹頭徹尾嘲弄冷笑の事實にして嘲弄冷笑の文句なり恰も朝から晩迄茶利滑稽の幕で持ち切つたる芝居を見るが如し余ハ之を稱して番内小說一名寺子屋小說と謂ふ忠臣藏の全段盡く番内のおなしみを以つてぶつ通されてハ如何に笑ふとに容易なる者も終に欠伸を催ふして手と共に其幕の長きを恨む可し天神記の全段盡く腕栢子僧の惡戲、ちよまよくの呼出し等を以て組織せバ如何なる芝居好きの婦人方も後には芝居はおさつに如かずとの嘆を發す可し寺子屋の塲ハ松王が「女房喜べ悴はお役に立つたぞや」の言を待つて光彩を增し番内の幕ハ勘平の二ッ玉お輕が薄命の愁嘆を得て面白味を生ず著者が小說中に只番内の幕寺子屋の塲のみを用ゐて大入客留の札を掛けんとするの大膽ハあつぱれなりと雖も余ハ其方法の拙劣なるを笑ふなり

或る人浮雲を評していやに氣どつてゐる、意氣がつてゐると言へり余初めハ其所以を知らず再三熟考の後漸く其理を發見せり即ち浮雲ハ事物を形容するに當つて先づ例へて言へバ紀州の西瓜と掛けてナアーニ、鐵面皮と解くと言つた樣なぐあひで謎躰の形容詞を用ふるに巧なると是或る一物の模樣斯くの如しと直接に言ずして何んでも構わず固形躰で有うが流動躰で有うが氣躰で有うが又生物だらうが死物だらうが月だらうがスッポンだらうが何んの遠慮もなく一點でも半點でも類似の部分を有する物ハ拔け目なく持ち込んで其形容詞を代理者となすと是なり例之ハ著者が編中に於て泥に尾の曳く龜甲(古洋袴)と言ひ胡麻鹽(老人の髮)と言ひ日の丸の紋の首の持主(頰の赤い人)と言ひ蚶貝(反身へる人)と言ひ蜆貝(恐縮する人)と言ひ其他白き女の手を指して細根大根の上に五本の白魚を並ぶると言ふが如き高い男を指して半鐘と云ふ如き一として他物を假りて一物を品評せざるなし又一として謎躰の形容詞に非るハなし若し首篇より結尾までの文句を精細に撿査する時ハ其の此種の用語の多數なる五本の指を十たび折るも猶ほ不足を告ぐ可し余はあながち此種の用語を以つて浮雲を非難する者に非ずと雖も著者が之を用ふるとの余り屢々にして濫用の弊に陷るを惜むなり眼なき俗人よりきどつてゐるとか何んとかの嘲りを受くるを悲むなり著者の筆僻猶ほ進轉せバ終には文三と言はずして丸の字の點落ち、日增のパン(苦になる人、堅く出る人)お勢と云はずして風船の乘り試めし、白犬のお尻(他の色で氣が變る、おもしろい畜生)又昇と云はずして建附の能い障子(隙際のない人)などと言はざる可からざるに至らん若し此の如くなれば美術を表看版とする小說も其美を損するに至る疑なし然らば此一些事も亦た小說に、大影響あり豈に注意せずして可ならんや是れ予が著者に向つて謎躰の用語に巧練なるを賞すると同時に其濫用を忠告する所以なり

余は是れ迄批評家の資格を有したり故に堅固なる城内に籠つた積りで攻擊者のなきを幸ひとし生意氣と高漫とを合併したる樣子ニ先を以て勝手放第なる妄言を吐けり然れども批評を書き終れば余は批評城と云ふ防禦を失ひたり周章狼狽援軍を乞はざれば則ち脫走の路を求めざる可からざる塲合に立ち至れり又何んぞ自衛するの勇氣あらんや況んや攻擊に於てをや若し著者足下より劇烈なる日丸を受くれば余は鹽をあぶせられたる蝸牛と一般ぎうの音も出す形も影も消ね入らざる可からず余は春のや二葉亭兩主人の前に於て謹んで兜を拔き平身抵頭其多罪を謝せんと欲す請ふ兩主人の寬大なる余が分限を忘れて差出口を呈したるを怒らずして余が及ばず乍ら瘦腕を以て文學の隆盛を謀り美術の振起を祈る親切を憐み玉ゐ(首勝なげな奴ぢや)と一言の賞辭を下し玉はらば余の喜び何物か之に加へん(完結)

## ●佳傳

### ○女丈夫の傳(其四)

#### 古の女王に名君ありたる事

前に三人の女王を擧げて其の才力智識の拔群ある趣きを示し

たるが之等にも劣らざるはロムバードの女王デヲデリンダと申したる方にぞある、此方は紀元五百六十年の頃ろバ、リアに於て生れ當國最初の侯ガラバルドの孃にて座はしけり其比ろ世未だ開けずして文學何くれとなく不自由なりしにも係はらず幼なきより立派の敎育を受けて夙に秀才の聞えあり二十九才の時ロムバーデーの王アンテールの后となられたるが暫らくしてチャイルドバートと云へる隣國の敵此の地に攻め入らんとするにぞ國王は親から兵を率ひて境外に防戰す此時女王は攝政と稱して王宮に留守し其の年の若き經驗の甚だ足らざるにも似ず万事を能く理めて國民の輿望に適ひたり、左ればば國民戰場に打死して世嗣すべき皇太子もあらざりければ國民總躰の請ひに迫まられて遂に位を踐み先ず租税を減じ農業を勸め慈善主義の數多の院を作り其外何事にも鋭意治政に力を盡し國運を進歩せしめられたると淺からずと云ひ傳へける。

次に亦た驚歎すべき女王は五百餘年の昔しノルエー、デムマーク、スエーデンの三國を治め此の一大共和國の女王として北方のセミラミスと迄で世に聞えたる彼千三百五十三年デムマークに出生したる皇女マルガレットなり父は即ちデムマーク王バルデマーにて六才の頃ろ早くもノルエーの國王ハークインと言ひ號けの約あり十三の妙齡にして既に入輿ありぬと承はる、然るに其后九年にして父の君世を去り玉ひしかばマルガレット后は其子ヲラウスをデムマークの王となして親から之を補佐ありたるに后ち四年にして亦た夫の君卒せられたれば即ち亦たノルエーの攝政とはなられぬ、折からスエーデンに於て國民其の王アルバートに反するの兆ありしかば皇后此機失ふ可らずとして親から壓してスエーデンの女王と宣言しアルバートに戰ひ勝つて遂に之を臣服せしめたり此時齡ひ三十九才と云ふ、此后若干の年月を經て千三百九十七年に至り三國の委員を集めて公會を開かせ後來スエーデン、デムマーク、ノルエーの三邦は相ひ共和して反離すべからず永久相ひ合して一つの聯邦となさんとは議決せしめ女王其手に政權を握つて之を支配したり、女王は掛る非常の才略を有して尙ほ女性に固有なる優美温雅の德を備へられたるとは歴史家が殊に尤も驚歎する所なりと云ふ。

同じマルガレットと名乘られしとも生れはシ、リーの善王レノートの御娘にして後ち英國王ヘンリー六世の后となられたる方は元と佛蘭西に於て敎育を受け膽力丈夫の如き女性なり

ける、左れば弱性の夫ヘンリー王を事に迂なりとして親から代つて万事を總理し彼の薔薇の戰ひの折にはランケスター黨の首らと爲つて赤花の軍を引卒せり、此時セイントアルバンス及びノルサムプトンの二ケ所に於てヨーク侯の爲めに二度迄で打ち破られたるがウェークヒールドの一戰に非常の勝算を博しヨーク侯は遂に此に於て打死するに至れり、然れど侯の嗣子父に代つて其軍を將ひ自からエドワード四世と號して皇后に反對し手ひどく赤花の隊を破りたるにぞ皇后亦た逃れてフランスに入れり、後ち密かに國に歸りて如何にもし元の地位を復せんとしたるに不幸にして復た打破られ敵に囚はれて塔内に繫がれ凡ろ二年が程は暗窓の獄裏に苦しまれたるがルイ十一世の助けに由てやうやく自由の身となられたり。

## ●小説

### ○薔薇の香

第十三回（哲人の惑）　月の舍しのぶ

開らひたる洋書を机の上に措て少こし前へ押し遣りゴロリと横形に打伏して手を以て頭を支へ斜めにラムプの光を眺めて瞬きもせず見つめたり、顏色白ろき火影に照つていよ〳〵白ろく眉、眼、口みな一齊に息を殺ろして彼向に對す、時は是れ夏の半バなるらん虫聲唧々として庭の叢にすだき蝶々の樣したる虫無遠慮に火を望んで飛ぶ、常ならば之を一つの風流としても眺むべきに念頭一箇の思案にさまよひて尙ほ決しがたく今まそれ之を何如にかせんと思ひ煩らへるものには斯る少さかの戲れも反つて不平の種とや爲らん、左手に持つたる團扇を擧げてハタと叩けばラムプの火スラリと腰を屈めて將に消んとす、之はと驚いて復た其儘に仕ながら思案決せざれば再たび煩らはしく又もや團扇を擧げてポッと叩く、無情の火も再三の失敬を容謝しがたく左らばと消えて後を滅し其影だに止めずなりぬ、嗚呼失策したりとは思ひ乍ら決句此方が都合宜しひと我慢して大仕掛に右の手を脫づし仰のけ樣にドゥト寢轉びて溜息一つ二つ……

此夜は不幸にして忍が最愛の月も出でず何樣かして此の少年の樣姿をと賴みにしたるラムプは腹を立てゝ消え行たり何如にせんと途方に暮る忍が袂をそと引いてコノ愚者人の心を觀んとするに月光燈火が何の効あるぞ今此肝腎切要の機會あるに何をうろ〳〵して迷ひ居るぞ、ソレ此の小説鏡を兩眼にあて謹んで篤くりと吟味せよと云ふ、之は何者の案內か顧みる

の暇なし早即に小さい眼を丸るくして此の目鏡の二つに當てはむれば不思議や青山哲と云へる一人物が胸の内心臟郷と云へる地方の景光現然として見へ渡たる、

嗚呼ァ、どうしたら善らうどうしようか、いつそ矢張思うた樣に仕樣か何もかれこれと迷うとはないァ元來造化の定則に由て切まつて居るんだから吾輩一人の利己心から決すると云ふわけでもないァ、そう仕樣そう仕樣、ダガチまたあの一方を見れば實に憫然ですあのようなる哲學者が‥‥あのような哲學者がどうも夫は不思議極まるです兎ても左樣云ふ事は別にあるまいァ兎ても類の無ひ事だァ苟くも吾輩の如きものをソンナニ信用して呉れらるゝ‥‥其上にどうも今ま那の樣な有樣に立至つて居られると云ふと、之は則ハち尋常の人情を棄てゝ一歩高い所の考を以て支配せらるべき所であらうァ、我輩いやしくもドゥモ道德を重んずる身であつて而して平生眞理の爲めには平凡の樂みを犧牲にする位ひの事は勿論だと覺悟して居るんだもの、此時だァ、何に此位の事が辛棒が出來んでどうするもので、何に糞、イカンゾ〳〵そんな心を起してはイカン〳〵我輩は苟くも哲學者で‥‥苟くも道德を主張するもので‥‥是しきの情慾が抑へられんで溜まるものか

然かしまた玆に一つの注意すべき事があるァ、今までそれでは吾輩が彼れと約束して一家を保つでセゥ、すると吾輩の性質と彼の人の氣質とテムペラメントが能く合うかどうかと云ふとだァ、どうも僕は成程あの人とは非常に仲の好ひ朋友です譯を知らん俗人から見たら早や契約でもしたと考がへるのは無理はない又た僕等がもしも人情の深理を知らなかつたら早くから心を決して無論契約したに違ひないデス、だが此所が即ハち吾輩等の得意で斯く親密に斯く仲が好くつても之は朋友として交いるから善いのであつて共にホーム(家)を持つに適當すると云ふ所の性質ではないと知つてるデス、だからウィ、シャル、チバー、マーリー(吾輩等は到底婚姻しますまい)と云ふ看板を懸けて初めから交際する譯で白河さんダッテ其理屈は知つてるに違ひないデス、然るに今ま此の病氣と云ふ新らしひ事情の爲に此の明白な眞理を破つて契約する、それで幾分か彼の人の勵ましにあつて先づソゥ病氣が直ると、直つても夫れからして非常に面白ひホーム、吾輩等が理想に置て居る家内の樂しみが出來なひとすると、先づ僕は義の爲めに之を辛棒すると

してもどうも白河さんの爲めに其の一生を暗らくするわけで必竟其の幸福を思ひ計つたと云ふ信切には爲らないテ、そう思ふと今ま斷然之を止めるのが後の爲には善いのです吾輩等も白河さんの爲めに尤も適當したる相手の出來るのを望み待つて居るのですテ、どうも其方が眞正の友義で彼の人の事を遠く慮ん計つた所でせう、どうも左樣思ふよ、ソウ歟夫れでは先づ左樣歟

突然起き上つて急に活潑らしく居直り暗らい乍ら庭前を赧めて暫時安心らしひ顔付をしたるが又もや左の手を机に突立てて頬を支へ乍ら

デスがさしあたり生命が危ない生命が危ない兎てもあれを直ほす工夫が無ひと云ふ實に困つたとシヤアないか、モウ之れで……さうさ丁度一ケ月餘の病氣で段々に瘠せる斗り藥はイクラ飮んでも効かん精神は益々衰ろへて弱はる斗りどうもとても尋常の醫藥では効能が無ひと云ふとだ、たゞ一の工夫は之に大ある勵ましを與へて精神を引立てゝ氣象を喚起して自身でどうしても直らなければならんと云ふよふにさせる斗りだと聞たが、スルトさしあたり白河さんを勵ますべき手立が外にないテ、後日永久の事はともかく今まもし其生命を助くるに効能があるとすれば吾輩友人として……哲學者として……道德を主張するものとしてどうも非常の犧牲を爲なければ成らんデス、どうしても左樣するより仕方がないデス、あゝどうも仕方がないデス、仕方が無ひとすれば吾輩喜び勇んで之を行はんければ成らん、玆が即はち義に勇さみ道德に鼓舞さるゝ所デ、玆が肝腎の覺悟だテ

夜目ながら眼光の照り渡り眉毛の逆立ち口元に決斷を定め元氣の壯快なるに忍は思はず目鏡を取つて感心したり

## ●寄書

### 秋夜（令樣）　桐北居士

雖がふせやの板ひさ〳〵もり來る月の隂さねて文机てらすさよなかば千草にすだく虫の聲蓀のやども秋來れば月の宿また花のやど心慰む一すじの琴かきならす夜もすがら

### ○文苑　鈴木弘恭大人　撰

初秋　頌榮女學校　高橋のぶ子

はしり出のかと田の稲の穗にいでゝゆたかになびく秋の初風

同　東京　土屋　峰子

打そよく朝の風にしられけりやかてわひしきあきのあはれハ

秋夜雨　同　島崎ふみ子

降雨にかねの音しめる秋の夜ハさびしきものゝ限りなりけり

田家鳴　同　土屋　都子

我かかどの稲葉色つくをやま田にものかなしきの聲が聞ゆる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

田家鴫　　同　　岡井くに子
守りあかす門田のいほのいねかてに聞もまびしき鴫の羽かき

月前虫　華族女學校　高﨑延子
夕月夜ほのめく庭のあさちふにふり出てなくすゞむしのこゑ

同　東京　齊藤佳年子
秋の夜のふくるまに〳〵月のみか虫の聲さへすみはたりけり

夕虫　成立女學校　横山柳子
秋風のかよふ夕べに鳴くむしのこゑ身にしみぬよもぎふの宿

同　高等女學校　櫻井賚子
とふ人もなき宿なるに夕べ〳〵なにをまつ虫ねのみなくらむ

萩　明治女學校　朝山艷子
たをりなばこぼれやすらん萩の花露おもげにゝ咲みたれつゝ

同　頌榮女學校　塚本富士子
あれにけるやどにも萩の花さけば路ゆく人ぞたちとまりける

庭前萩　明治女學校　久野茂子
我背子が植し秋はき去年よりもいたくしげりて咲にけるかな

同　同　郷幸子
待れつるまがきの萩のさきしより秋のあはれぞいや勝りける

朝貌　成立女學校　築山茂登子
なか〳〵に朝いせられずなりにけり垣の朝貌さきそめしより

同　同　菊池なほ子
おく露をはかなきものと思ひしにつゆよりもろき花のあさ貌

松上鶴　茨城　羽生政子
かげ高きときはの松をねぐらにて幾世へぬらん千代のたつる

萩を贈る消息文　明治女學校　神中操子
野邊の千くさをたてぬきに機織る虫やおり出しけん日にけにさき出る草花にしきの如くなるをさすがにねたしとにやほどもなき前栽にうゑおきたる萩もつねよりはいみじう咲にほひ侍れば學びのいとまの御なぐさみにもとて贈りまゐらすいかで玉の言の葉をもろへ給は、此花の面目にこそあなかしこ

## ●新報

### 宮廷録事

○皇后宮陛下の御乘馬　皇后宮陛下には時々洋服を召させ給ふととなりしに付き御乘馬をも御試みあらせ給はざれば御不都合の塲合もあるべしとの事にて此程中より御苑内に於て掛り官及び女官の方々を御相手に御乘馬の御稽古を遊ばさるゝ由仄かに承り及びぬ

○ヴィクトリヤ學校　英國女皇五十年祭の寄附金を以て設立せし横濱百七十九番館の同校は去る一日を以て開校式を執行せしが入校の生徒は三十五名にて此教師はヒントン氏なりと云ふ

○女子の親睦會　舊東京女子師範學校の女子百數十名は去る三十日淺草須賀町の鴎遊館にて親睦の宴を開き餘興には同館のかもめ踊り等ありて頗る盛會なりしよし

○夫は妻の書翰を開封する事を得ず　妻に宛たる書翰は其夫たるもの之を開封する事を得るや否やの論は久しく世上の一問題となり居りしが今度近着の紐育トリビューン新聞を見るに合衆國にては郵便條例及び修正條例に於て夫妻間相互に書翰を開封することを禁止す之を犯するものは修正條例第三千八百九十二款に依り五百圓以下の罰金を課し又は一年以下の重禁錮に處し或は兩者を併科すべしとありと云ふ

○山口女學校　大日本教育會山口支會の設立に係る同女學校は山口縣山口早間田町にあり去る十五日開校式を執行せしが入學者日に増し既に六十餘名の多きに達したりと

○高齢の寡婦　英國チュエー、パイルのウエルス國に住する一寡婦は今年百七歳の高齢に達せしも坐作進退自由にして家事に執掌し裁縫等をなすに少しも眼鏡を用たる事なしと云ふ

○小學教員女子を用ふべし　とは前項谷子爵の意見及び吾人か常に唱道する所にして學校經濟の點より論ずるも生徒慈育の點より見るも至極便利の事なるが宮城縣仙臺の各小學校は漸次此方針を取るものゝ如く已に東二番町小學校の如きは訓導に授業生に多くの女教師を使用し居り今又岐阜縣女子師範學校の卒業生三名を聘し一名を立町高等尋常小學校に二名を東二番町高等尋常小學校に配置し漸次尋常科の生徒は女教師を以て教授せしむる豫定なりと云ふ

○舞樂會　去る三日午後七時より芝の水交社にて開きたる舞樂會は高木海軍軍醫總監、鍋島式部長官、伊藤總理大臣の令孃等男女併せて三十六名及び宮内省の令人二十六名參集し同時より舞樂を初め同十一時に終り其間立食の饗應ありて中々盛んなりし由

○古今倭畵婦圖譜　京都の畵家巨勢小石氏が催主となり富岡鐵齋、西尾鹿峰、市僧村水香の諸氏が贊成にて去九日同地花見小路有樂館にて古今倭畵婦人圖會と云ふを催す由同會の目的は我國古今の婦人畵を蒐集し婦人風俗の變遷及び衣裝粧飾の沿革等を探究するにありて自今時々開會する由なり

○愛知女學校　名古屋區榮町に新築せし同校は去る二日開校式を行ひしに付き大縣學務課長岡田高等小學校長及び學務課川崎屬并びに女教師生徒等臨席し午前九時に初對面の禮式了りて後ち教科書等の取極ありしと又右開校に付き坂本參謀長の夫人にも教授を手傳はるゝ由同地よりの通信

○綴織の天井　御造營中の皇居御表謁見所の御格天井は今度金綴織張と定められ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

二百二十餘枚の織立方を此程京都高等女學校織綴科へ命ぜられたる由聞く所に依れバ其一枚の寸法ハ方三尺九寸にて此價額一枚凡て三十圓内外なりと又右の品ハ餘程緻密に手込たるものゆゑ最も熟練の生徒にても一ヶ月に二枚ハ織り上げ難く少く手の遲きものハ一ヶ月に一枚も覺束なき程なりと云ふ

○京都同志社女學校　今度同校の教科中へ割烹諸禮の科を設けしに付き同地の貴婦人達が創設に係る婦人割烹會ハ同校へ合併する事になりたりと

○婦人會開設　滋賀縣大津分營將校の各妻娘にハ今度婦人會を起し已に此程松本軍醫正が會長となり第一會を開きしが右ハ專ら軍人の慈善を主とし旁ら懇親を篤くする爲めなりと

○音樂演習會　高知尋常師範學校女子部にてハ此度音樂演習會を設置されしが其期日ハ毎月水金の三曜日にて演習員ハ同縣各小學校の女教員及び同校女子部卒業生に限ると云ふ

○產婆講習所　京都府にてハ今度新開業產婆養成の爲め產婆講習所と云ふを設くるに付去る八日上京區役所にて開く產婆會の定日に其規則及び場所等を決議せまよし

○京都婦人慈善會　京都倶樂部内に設立せし同會ハ今度會員の誘導に依り府立商業女學校の二年生が入會せしに付き目今毎月二回乃至三回づゝ書籍の講義及び風琴奏樂唱歌等の會を催ふすよし

○松山婦人會　愛媛縣下松山の有志者ハ今度松山婦人會なるものを設けられ婦人の品位を高め社會の幸福を增進するを目的とする由

○景山英女の書翰　左の書翰ハ目下三重縣監獄に在る國事犯者景山英女より大坂に在る友人某へ寄せたるものにて教育不充分なる婦女子の爲め幾分の益なきにあらねバ茲に掲載す

早冷乍動くの候尊堂諸位愈々御清適に御座被遊候や奉伺候降て愚妹事入監以來蠶々無異乍憚御放慮可被下候扨て契兄には入獄爾來愚妹輩の爲め種々御配慮御奔走被下候段實に一方ならぬ御盡力を蒙り候事と千萬有難奉感謝候就てハ愚妹事も斯く寬典に處せられ候得バ轍近無恙靑天白日の身となり乍不肖發憤苦勵仕り今回の不忠不孝の汚名を雪ぎ尊兄及び他諸位等が御芳志の萬一に報酬仕らん心得今や開明の隆運に膺し蒙を啓き陋を廉にするの良藥其料に乏しからず若し今日にして昔時度外視せられし婦女なりと雖ども豈に小成に安んずべけんや宜しく高尙の學理を研究し遠大の志を立る事を勉め以て遠く歐米の婦女輩が右に出でん事を期せずんバあるべからざる事と存候嗚呼愚妹や身今鐵窓の下に呻吟するの不幸にあり實に悲しむべきなりと雖ども亦大に身が將來の龜鑑となすべきの材料利益を得し事も亦少なからず就中交際の利益ハ愚妹實驗し得て大に其功德あるを感し居候次第五常を具備するの動物にして若し交際なかりせバ讀書萬卷も何ぞ益あらんや愚妹も誠に契兄が婦女子の交際法を創立せられしと甚だ我國婦女社會の爲めに欣悅仕居候次第何卒々々申す迄もなきとながら一層盛大になし玉ひ後來英才有爲の婦人を輩出せしめられんとを奉祈候嗚呼東洋のマダム、ローランド其人たらんと欲する秀才英識兼備の淑女を發出するハ十九世紀の創立なる此婦女交際會にあるならんと將來を預想し來り轉た喜悅に不堪次第に御座候先づハ御禮旁々適々感する處あり愚見を簡短に呈するハ是れ愛國熱情の一分子が溢れ出たる愚妹が老婆心と御憫察被下度時下秋冷幸ひに御自愛あらんとを頓首百拜

二伸乍憚交際會諸君へ此度ハ別に拙簡呈上不仕候間何卒契兄より宜しく御鶴聲を請ふ

在監人　景山英

某殿玉机下

## ●海外女事

○小說よく女職工の困難を寫す　英國の小說家ワルターベサント氏は曩に All sorts and Conditions of Men と云へる小說を著へして細民の困難なる景況を尤も細かに寫し出したれば讀む者委く感激して輿論を大に動かし遂に女皇陛下人民院なるものを設けさせられて民と共に和樂するの場所を備へ玉ひたるとなり、然るに同氏は其後またく The Children of Gibeon なる小說を作りて女の職工が非常の困苦をする有樣を同樣の筆力を以て精しく寫し出しければ讀者も又々大に感激して女職工救助の事此頃の大問題と爲り遂に女職工現狀取調委員なるものを設くるに至りたり此委員の中にはスタレンー孃パーチット夫人レーチル夫人其外の貴女あり委員は三つに分れ第一は女職工同盟の類に付て取調らべ第二は女職工の仕事と其生計との關係を取調べ第三は女職工の給料時間及び事情ニ付て取調らぶるとゝなり尙ほ公衆の助力を乞へんが爲めクイン雜誌に一欄を設けて諸人の投書を乞ふと云へり

○女王及びラムセー孃　前號にも毎々記したる彼のラムセーはカムブリッチ大學にて數多の男子に立まさり學力拔群なりしかば女王は親から筆を染めて其寶影を惠ませ玉ひ秘書官ポンソンビー氏よりは龍旨の趣きを書き添へて太たく同孃が才能を賞し玉へり眞ニ有がたき限りと云ふべし

○家政學校　女子に家政の事を教ゆるの必要は西洋に於て夙に論ずるとなるが近年に至りては其論いよく盛んなり扨ては此の授業は何部の學校に於て施すべきなどゝ喧しく議論するとゝなれり然るニヒㇽデン孃と云へる英國の一女子は早くより之ニ掛念し試みの爲め自から五年の間ト婢の如き仕事をして家内萬事の取扱方を經驗し此頃ろ一つの學校を設けて年若き娘等を預り家政學を實地に教授すると云ふ而して之が爲に特に一つの協會を作り又たグローセスターに本部の家政師範學校を作り追々は所々に設くべき此程の學校の教師となるとを心得せしむる準備を爲せり

廣告

鐵筆將軍戯述

献金餘聞 **天保紳士** 定價金二十五錢 郵便代用一割增 郵税六錢

有は海防費の献金に附て著者が特意の鐵筆を以て世の人情を穿知したる珍書なり四方の諸君請ふ續〻購讀あれ

發賣所 東京本郷區元富士町二番地 **盛春堂書舖**

専門 **婦人洋服裁縫教授** 神田今川小路一丁目一番地 **石橋**

御望の方は本月内に御申込み有之度候、但し東修一圓、月謝七十五錢○大人仕立料一圓五十錢以上、小兒同五十錢以上を以て依賴に應ずべし

○田口卯吉君結髮沿革附錄○和歌路君校○巖本善治君跋
○渡邊鼎君著

**束髮案内** 美製小本八十頁細圖入 定價十五錢郵税四錢也

當今束髮流行の折柄其結び方不案內の婦人少からず此書ハ日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に教へ一々細圖を附して親切に案內すれバ何如なる僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論か束髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々ハ宜く一讀あるべし

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序○朝野新聞記者横山雅男君著

**婚姻論** ○定價一册三十五錢郵便税十四錢

右は横山君が得意の統計學上より婚姻の定義其外早婚晩婚雜婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく婚議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるものゝ亦た青年の男女の方々必讀の書なり

東京々橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

## 明治女學校塾生心得書(第三)(前號一日時間割の第二條に續く)

凡そ斯く大勢集り勉強するものなれバ讀書算術など總て默して靜かに爲すべし最初此の仕方に慣れざるものハ餘程勉强の爲にくきものなれども大概半ヶ月も辛棒せバ〻つてこを好むに至るべく亦た孰中の風儀を宜くするには此規則尤も必要の事ゆへ緊てよく之を心得置くべし但し暗誦の如く聲を發して仕度するものハ則ち自由時間に於て成べく之を都合すべきなり

第三條 十一時半より一時迄を復た自由時間とし十二時鐘を鳴らして晝食となす

第四條 一時より五時迄を四時間に仕切りて漢學算術其外種種の科業を授く此四時間は復た勉學時間なれば前に述べたる如く常に講堂に集り時來れバ教場に出づべし

第五條 五時に鐘を鳴らして夜食とし其後七時に至る迄を運動時間とす運動時間には學校の門外に出で〻散歩するを許すものあれども其外出するものは必ず相伴ひて離るべからず且つ取締之に附添ひて萬事保護すべし

第六條 七時より九時半迄を復た勉學時間とす故に外出せるものは必らず七時迄に歸校すべく常に七時を門限とし之に後るゝものは一々其事由をたゞすべし。但し十二歳以下の小女は七時半より八時半迄を勉學時間とし十五年以上の生徒よりも一時間を早くして床に入らしむ

第七條 八時半(十二歳以下)若くは九時半に至らバ終業總會を開き後ち塾生一日の品行點を取調ぶ

第八條 終業總會終りたる后ちより九時(十二才以下)若くは十時に至る迄に塾生は各自二階の寢室に至りて床に入るべし。床に入るの後三十分即ち九時半(十二才以下)若くは十時半に取締見巡る一以上九時半若くは十時半より翌朝六時に至る迄を安眠時間とす

第三節 休日、外出、外泊の事

第一條 毎週土曜日午后講談を終りたる後及び日曜日一日並に大祭祝日及び各學期後若干日等は休日とす、休日に塾中に止るものは始業終業の兩總會に出席を要するの外其餘は自由時間同樣に心得るを得べし

第二條 休日には勝手に外出するを許すと雖も凡そ塾生の外出するものは必ず二人以上相伴ふを要し一人にて出で行くを禁ず且つ其時々必ず取締に出先を申置くべし(未完)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可


## ○稟告

弊店儀豫て洋服店開業の計畫仕曩に英佛國へ手代派出させ親しく彼地の服裝を見聞し現時流行の男女服地其他附屬品等種々仕入仕候處追々着荷尚又倫敦巴里に於て熟練なる裁縫師を僱入既に來着仕候然るに未た洋服店建築中に候所御得意樣方ゟ陸續御用被仰付折角の御厚意に悖り候ては甚だ遺憾に御座候間當分の內吳服店に於て業務相營み御注文に應じ度何卒多少に係はらず御用向被仰付度此段偏に奉冀上候也

駿河町
ゑちごや
三越得右衛門



**發行**

九月。三日 十日 十七日 廿四日
十月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十一月。五日 十二日 十九日 廿六日
十二月。三日 十日 十七日 廿四日 三十一日

**定價**

一册。五錢 郵税。一錢 (但府內無郵税)
十册。四十八錢郵税。十錢 (同前)
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

**廣告**

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

**女學雜誌賣捌所**

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町巖々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町辰明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○東京本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋東へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○勢州松坂家里初枝

發行所 東京京橋區日吉町八番地
本局 女學雜誌社
持主兼編輯 巖本善治
印刷 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8 HIYOSHICHÔ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.